

## ピヒル森林研修所による現地研修(受講した立場より)

オーストリアの林業とは何なのか、一体どこが違うのかと思われるかもしれません。タワーヤーダやハーベスタなどの大型機械に注目しがちですが、チェンソー作業はほとんど同じです。彼らも私たちと同じように伐り、同じことで苦勞し、過去には多くの事故もありました。ではなぜ、遠くから招いてまで教えてもらうメリットがあるのでしょうか。

その理由のひとつは、彼らが一流の技術者でありながら、教育のプロフェッショナルでもあるということです。教えることの上手さ、安全に対する厳格さに気付かされます。私たちがどんな失敗をしやすいか、どうやったらもっと安全にでき、もっと利益を出せるのかを彼らは良く知っています。「彼らの技術を見学する」というスタイルではなく、我々の作業を指導してもらうやり方のほうが、彼らの実力が最大限に発揮されます。そしてそれは、職場や林業アカデミーなどで教える立場の人にも貴重な体験となるでしょう。日本の林業に欠けているのが優れた教師なのだと痛感しました。

もう一つの理由は、それぞれの技術に根拠があるということです。私たちが何となくやっている作業について、彼らは原理や理由を知っていて説明できます。彼らほどの確かな説明をする人を見たことがありません。たとえば通常、受け口と追い口を同じ高さでは切りませんが、そうする理由を論理的に説明できるのでしょうか。ひとつの技術・ひとつの動作ごとに根拠があります。画期的な新技術を期待されるかもしれませんが、彼らが教えるのはもっと地味で基本的な、しかし現場の技術者にはとても重要な内容なのです。(もちろん彼らは架線集材などで私たちの知らない技術を教えることもできます。)

チェンソー作業と共に、もしウインチ集材をすることがあるのなら、彼らのやり方を教わることを勧めます。オーストリアではウインチ集材路を設定して、残存木の傷付きを抑えつつ生産性を上げる方法がとられています。言葉では列状間伐のような印象を受けるかもしれませんが、伐倒と集材を同時進行する定性間伐です。正確な伐倒技術と先を読んだ戦略が求められます。やるほどに多くのメリットを発見し、安全性・生産性・品質(傷つき)のどれも損ねない、理にかなったシステムだと気付きます。

遠いオーストリアと日本で、はじめは何が違うのかに興味がありましたが、何もかも同じだということが分かりました。しかし、同じ環境にありながら彼らが確立した技術、そしてルールには、経済・安全・環境など、なにも置き去りにしていないことが伝わってきて胸を打たれます。社会的・科学的根拠に基づいた彼らの指導には、100%の信頼が置けることを保証します。多くの予算が必要かもしれませんが、もし十分な時間を確保できれば、プロとして果たすべき義務に気付き、そして彼らの指導によっていくつかの命が守られるかもしれません。

最後に付け加えるならば、彼らから教わることは、今日からできることばかりです。